

# 吉井源太と明治

〈14〉

## 典具帖紙を世界へ

村上 弥生

「土佐紙業の恩人」没後100年

典具帖紙は、かげろうの羽のような紙として知られている、楮のみで作られるごくごく薄い、透けるような紙。今、土佐和紙のなかでもっとも有名な紙ではないだろうか。この紙の明治時代の様子はどうだったのだろうか。

明治九（一八七六）年八月十一日の「浪花新聞」に次のような記事が出たと「日本紙業総覧」に紹介されている。

「日本の芳野紙はアメリカあたりで殊の外珍重されます。このような紙は、イタリヤでは出来ませんが、日本の品よりはるかに劣ると言うから、今に追々輸出する様になりましょう」

芳野紙というのは、奈良県の吉野地方で漉かれる、

漆漉しなどに使われた薄紙のこと。典具帖紙によく似た紙質のものだ。

この記事からは、こういって強くて薄い紙は欧米になく、大変貴重だったことがわかる。海外での使い道は、歯科医の医療用、ガラスの内貼、箱などの内包、

上流社会での衣服包みなどのようにだと「日本製紙論」で説明している。後にはタイプライター用紙としての輸出が盛んになるが、このころはまだそのような使い道ではなかった。

この紙は、古くは岐阜県的美濃和紙産地で漉かれていたものだ。明治時代に高知県でも漉かれるようになった。明治十六（一八八

三）年に第一回関西府県連合共進会というものが大阪

で開催された。明治時代に各地でこのような会が開かれ、色々な物産が紹介されたり、審査されたりしていた。

この共進会に源太は、六枚が漉ける簀桁で漉いた典

具帖紙を出品した。大型簀桁が広く知られるようになったきっかけであったという。この時、岐阜県ではまだ旧式の簀桁で漉かれていて、明治十九（一八八六）

年にアメリカ・シカゴから

特約契約の申し出があったが、大量に漉くことができないために応じられない事があったりした。その後、源太の開発した大型簀桁が岐阜へ伝えられた。

この紙の、世界への展開を見てみよう。「日本製紙論」によれば、世間に紹介されたのは明治十三（一八八〇）年だったことが書いてある。この「世間」というのは、「世界」という意味で使われている。

この年に、源太らが伊野に作った製紙社という組織が典具帖紙の見本を作り、初めて東京や横浜の貿易商に出した。この製紙社というのは、土佐紙の改良と販路拡大を目的としたもので、今で言う同業組合のよ

うなものだった。

明治十八（一八八五）年にアメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された、万国工業兼綿花百年期博覧会にこの紙を出品して一等賞を受け、また明治二十二（一八八九）年フランスで開かれた万国博覧会でも一等賞金牌を賜った、と日記に記録されている。

まもなく海外への輸出が盛んになるが、次第に粗悪品が売られるようになって、貿易商に見破られ、信用を失墜するという苦い経験が続く。この時には、岐阜県と共同して典具帖紙の輸出を続け、次第に名声を回復していったという歴史もあった。

（京大大学院研修員、京都府在住）



長い繊維が絡み合う極薄の典具帖紙